

外国語教育メディア学会 (LET)
関西支部 2014 年度春季研究大会
発表要項集



日 時： 2014 年 5 月 17 日 (土) 10:00~17:10

場 所： ノートルダム清心女子大学 ヨゼフホール
〒700-8516 岡山市北区伊福町 2-16-9
<http://www.ndsu.ac.jp>

主 催： 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部
<http://www.let-kansai.org/>

後 援： 岡山県教育委員会

事務局： 〒669-1337 三田市学園 2 丁目 1 番地
関西学院大学理工学部 氏木道人研究室内
Tel. 079 - 565 - 7028
E-mail: kansaiet@gmail.com

プログラム

- 9:30-15:50 受付■ ヨゼフホール 3F
- 10:00-10:15 開会行事■ 1300 教室
司会◆ 菅井 康祐 (事務局長・近畿大学)
挨拶◆ 小林 修典 (会場校・ノートルダム清心女子大学)
挨拶◆ 若本 夏美 (支部長・同志社女子大学)
- 10:20-11:40 ワークショップ1■ 2300 教室
講師◆ Robert Waring (ノートルダム清心女子大学)
“Dealing with Vocabulary in the English Language Classroom”
- ワークショップ2■ 2301 教室 (当日先着順で40名まで)
講師◆ 井狩 幸男 (大阪市立大学), 多田 玲子 (大阪教育大学)
有本 純 (関西国際大学), 河内山 真理 (関西国際大学)
「チャンツで広がる小学校外国語活動: 導入から音声指導・発展活動まで」
(早期英語教育研究会・英語発音教育研究会合同企画)
- 10:00-16:00 業者展示■ 3F
休憩室■ 2302 教室
- 11:40-12:30 昼食■ 1F ラウンジ
運営委員会■ 2201 教室
- 12:30-13:00 支部総会■ 1300 教室
- 13:05-15:20 研究発表・実践報告・教材開発 ①13:05-13:35 ②13:40-14:10 ③14:15-14:45 ④14:50-15:20
- 第1室 (研究発表) ■ 2300 教室
司会◆ 今井 裕之 (関西大学)
- ① 小学校教員養成課程における大学生の学習意識と行動の傾向: 「小学校英語教育」の教科化を踏まえて
江原 智子 (環太平洋大学)
 - ② 大学における英語科教育に関する内容言語統合型学習に対する認識
宮迫 靖静 (福岡教育大学)
 - ③ 質問紙調査による回答の揺れといわゆる量的研究の危うさ
東 淳一 (順天堂大学)
 - ④ 音読・サイトラ・発音学習・TOEIC(R)テスト問題練習の組合せによる学習効果: TOEIC(R)テスト課題による検証
飯野 義一 (神戸大学 大学院生), 山田 玲子 (ATR 知能ロボティクス研究所)
- 第2室 (研究発表・実践報告) ■ 2303 教室
司会◆ 佐藤 臨太郎 (奈良教育大学)
- ① オール・イングリッシュの授業に対する日本人英語教師(NNEST)と学習者の Belief 比較調査: 授業内での TL 使用に関する一考察
上野 育子 (関西学院大学 大学院生)
 - ② 日本人英語学習者の語彙連想量と英語によるライティング力の相関関係
鳥羽 素子 (大阪市立大学大学院)
 - ③ Creating and Implementing a Vocabulary Learning Program Using Free Web Services and Software
SULVA, Mishka (大阪教育大学 大学院生), YOSHIDA, Haruyo (大阪教育大学)
 - ④ イメージを用いた句動詞指導: PAC 分析を用いた明示的指導と偶発的学習効果の比較研究
山形 悟史 (大阪教育大学 大学院生), 吉田 晴世 (大阪教育大学)

第3室（実践報告・教材開発）■ 2200 教室

司会◆ 菅井 康祐（近畿大学）

- ① 官民協働による「おかやまイングリッシュビレッジ事業」の展開
福原 史子（ノートルダム清心女子大学），大橋 典晶（中国短期大学）
城之内 庸仁（岡山市立福浜中学校），水野 純次（倉敷市立精思高等学校）
- ② Video Intervention to Raise Awareness of Common English Intonation Patterns
PORTER, Mathew（Hiroshima Bunkyo Women's University）
OKADA, Azusa（Hiroshima Shudo University）
- ③ リーディング授業における学習者の教室外活動促進と学習経験の個性化
吉田 ひと美（関西学院大学）
- ④ 文法・語彙例文集の開発、e-learning 語彙学習システムの開発と学習効果
姜 英徹（立命館宇治高等学校）

第4室（実践報告）■ 2203 教室

司会◆ 杉森 直樹（立命館大学）

- ① 英語学習教材アーカイブの授業での利用
平尾 日出夫（追手門学院大学）
- ② 海外学生の評価に基づくプレゼンテーションの振り返り：ブログ交流から学ぶ世界に
通用するアイデアと通用しないアイデア
塩見 佳代子（立命館大学）
- ③ 英語の使える「リケジョ」育成を目指した英語授業
問田 雅美（清心中学校・清心女子高等学校）

15:20-15:30

休憩

15:30-17:00

基調講演■ 1300 教室

「国際共通語としての英語と学校英語教育の目標について」

講師紹介◆ 山本 誠子（神戸学院大学）

講師◆ 鳥飼 玖美子（立教大学）

17:00-17:10

閉会行事■ 1300 教室

司会◆ 氏木 道人（新事務局長・関西学院大学）

挨拶◆ 野村 和宏（副支部長・神戸市外国語大学）

17:40-19:40

懇親会■ ホテルグランヴィア岡山 19F スカイラウンジアプローチ

司会◆ 今井 裕之（関西大学）

挨拶◆ 吉田 晴世（副支部長・大阪教育大学）

お知らせ

- 参加者は、受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET 会員は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円（大学院生は、学生証を提示していただくと 1,000 円）を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので、支部事務局（受付）までお申し出ください。
- 当日学内の食堂は営業していません。1F ラウンジ横の丸善キャンパスショップは営業しておりますが（8:45-14:30）、十分な昼食の供給は見込めないため、学外施設もご利用の上、事前にご準備ください。
- 館内は全面禁煙です。
- 懇親会は岡山駅前「ホテルグランヴィア岡山」にて開催いたします。参加費は 2,000 円（学生 1,000 円）です。当日受付にてお申し込みください。

国際共通語としての英語と学校英語教育の目標について

鳥飼 玖美子（立教大学）

2011年以來、日本政府は「グローバル人材育成」政策を推進し、2012年には「グローバル人材育成戦略」（審議まとめ）を公表。文部科学省は2012年に「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」、2013年12月には「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表した。これらはいずれも政府の「グローバル人材育成」政策を受けてこれまでの英語教育改革をさらに推進するという意味合いが強い。「国際共通語としての英語」という言葉を使った2012年の「提言」でも、あらためてどのような英語を指しているのかを定義付けて論じているわけではない。おそらく、グローバル時代の国際共通語が英語であることは自明であるという認識に立っているものと思われる。これは一般社会および英語教育界にあっても同様であるように窺われる。

その意味で特筆すべきは、同年に日本学術会議が提案した「(英米などの) 地域語としての英語」と「国際共通語としての英語」を分けて論じる視点であり、大学英語教育にひとつの示唆を与えるものといえる（日本学術会議、2012、『大学教育の分野別保証のための教育課程編成上の参照基準言語・文学分野』（大学教育の分野別質保証推進委員会、言語・文学分野の参照基準検討分科会））。

一方、海外では「国際共通語」としての英語が現実にどのようなものであるのかを同定する努力が続けられているが、研究成果を教育に応用するまでには至っていないのが現状である。

しかし、英語教育において、「特定の地域文化を理解する為の英語教育」と文化的負荷を軽減した「国際共通語としての英語教育」を峻別することは重要であり、また、「分かりやすさ(intelligibility)」を追求するとは具体的にどのような面で何を求めるのかを考えることは必要である。

本講演では、近年の政府による「グローバル人材育成」推進政策に言及しつつ、国際共通語としての英語をどのように学校英語教育で扱うかを提言したい。

Dealing with Vocabulary in the English Language Classroom

Robert Waring (ノートルダム清心女子大学)

This workshop will first outline what types (and amount) of vocabulary students need to master. We will also look at the major components of language courses (form-focus and communicative focus, input and output) and see how and how we can fit that into a balanced curriculum. We will look at how the cycle of learning assists learners in their accretion of knowledge before we look at the core principles underlying vocabulary instruction and an optimal balance of contextual vs decontextual, and deductive vs inductive approaches and look to see when each will be most beneficial. Following this we will look at several steps to follow in a form-focused class from engagement, contextualization, presentation, assessment, integration, activation and personalisation.

チャンツで広がる小学校外国語活動： 導入から音声指導・発展活動まで

井狩 幸男（大阪市立大学） 多田 玲子（大阪教育大学）

有本 純（関西国際大学） 河内山 真理（関西国際大学）

本ワークショップでは、小学校、あるいは中学校で使えるチャンツを取り上げて、どのように授業に取り入れるかを紹介する。チャンツは、語彙や音声面の効果だけではなく、それを使ってさらに国際理解、環境問題などの教育も狙うことが可能である。

チャンツを授業で利用する際に、まずチャンツそのものの意味・内容を理解させることが必要である。児童・生徒への導入の仕方、意味をどう理解させるかを、具体的なチャンツの例を挙げて紹介する。

次に、音声面について取り上げる。教員自身が指導上注意すべき点に加えて、生徒のレベルに合わせた音声面の指導を考慮しなければならない。教員は、チャンツを使おうとしているクラスでの目標となる音声レベルを検討しておく必要がある。また、チャンツでは、日本語に影響される「カタカナ英語」のままでは、英語よりも母音が多くなり、リズムに乗りきれないことが起こる。また、連結や脱落といった音変化を取り入れると、より自然にリズムに合わせることができる。小学生は、文字に十分慣れていない場合、主に耳で聴いて繰り返すので、比較的モデルに忠実に合わせられるが、中学生になると綴り字に引きずられてしまう。リズムに乗るために必要な音変化や、注意すべき英語の音について学び、練習する。

最後に、チャンツを次の段階である自己表現にどうつなげるのか、展開方法を学ぶ。実際に体験しながら、チャンツの利用方法について学ぶ。

小学校教員養成課程における大学生の学習意識と行動の傾向： 「小学校英語教育」の教科化を踏まえて

The English Learning Tendencies of Pre-Service Teachers at a University:
Some Implications Toward English (Subject) Classes at a Primary School

江原 智子（環太平洋大学）

キーワード：English learning, pre-service teachers, regularized English education, primary school

2011年度より公立小学校で週一回の「外国語活動」が必修化され、指導は担任教師が主導するというので、多くの小学校現場における実践研究や報告がされてきている。しかし「外国語活動」が定着の様を見せ始めた2013年、新たに「小学校英語の教科化等」が検討され、同年12月には「英語教育改革実施計画」が公表された。2014年2月には有識者会議が開催され、まだ計画段階ではあるものの、小学校英語教育の教科化に向けた流れは日々進んでいるように思われる。

このような背景から、小学校教員養成機関である大学においても指導者養成課程に関する改善が当然に検討されている（文科省、2013）。現場の対応の緊急性から、現職教員研修に比べると、教員養成課程に在籍する大学生を対象とした研究は後回しになっている感がある。しかし、このうち新規採用教員として小学校英語教育に携わる彼らへの対応や養成課程の見直しも急務の課題であることは間違いない。同時に、大学全入時代における相応の学士力・教養力の涵養が大学教育現場では課題となっている。小学校では教員は全科目を担当するため、英語が教科化すれば、現在教員養成課程で学ぶ大学生は他の専門学部に先んじ、総合的な学力の獲得とより専門的な英語授業の準備をも期待されるだろう。

本研究では、小学校教員課程に在籍する大学生の初年次から、英語を中心に一般教養科目における学習と英語教育に対する意識・行動の姿勢に注意を向け、経年的に、どのように変遷したかについて質的に調査を実施した。初年次に自己調整的な学習への意識と行動の差からプロファイルした（Ebara, 2012）大学3年生5名に回想インタビューとアンケートを行った。初年次での基盤学習講座での取り組み、例年の学内チェックテストの結果と、後の継続学習の様子を参考に分析した。更に、小学校教諭を目指す彼らが小学校英語教育にどのような考えを持って準備をしているのかを聞き取った。ここで明らかになった大学生の認識の違いは、少なからず大学入学以前の彼らの英語学習への印象や意識との関連性があり、その後の行動や環境選択にも影響が見られた。

大学生は学齢期の最終段階に存在しており、彼らの現状は当然、それまでの学齢期の経験に影響されている。近い未来に現場で活躍することが期待される、小学校教員養成課程で学ぶ大学生のこれらの傾向や意識の分析を基に、近未来の小学校英語教育を視野に入れた教員養成の在り方についても検討していく。

大学における英語科教育に関する内容言語統合型学習に 対する認識

University Students' Perceptions of Content-Based Instruction on English Language Teaching

宮迫 靖静 (福岡教育大学)

キーワード：CBI 英語科教育 学習者の認識

小学校に本格的に英語授業が導入されるという衝撃的なニュースに象徴されるように、我が国の英語教育は変動期にある。現行の高等学校学習指導要領・外国語編（文科省，2010）では、英語科目は英語で教えることになり、5年後には、小学校での英語科授業実施に連動して、中学校においても英語による授業が想定されているが、将来の小・中・高等学校英語教員を育成する大学はどのようなのだろうか。内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning: CLIL）や内容重視授業（Content-Based Instruction: CBI）が注目される中、英語使用による英語教職に係る「英語科教育」科目が、大学において広まっている様子は余りない。英語による英語教職科目は必要ないのだろうか。この発表では、ある教員養成大学において実施した、CBIによる英語教職科目（英語科教育研究A）に関する学習者の認識を中心に探究的な調査を報告する。この授業は一般教育科目ではないので、タスク重視の言語教育とは区別するため、CLILではなくCBIとした。これは、2013年度後期に、中・高等学校教員免許取得に係る必修科目の一つとして開講され、教科書としてHow to Teach English (Harmer, 2007)を使用した。履修者は英語科の主・副専攻の2～4年生70名であった。目的は、英語教育に関する基本的な知識の学習に加え、英語への接触とその使用による英語能力の向上とした。授業形態は講義と演習の複合としたが、その比率はおよそ2対1であった。後期終了時に、この科目に関する認識を6段階リカード法による質問紙法で調査したが、質問39項目は、CBIに関する調査（Cheng, et al., 2010; Ke & Chen, 2014; Snow & Brinton, 1997; 近松, 2009）を参考に作成した。分析では、まず、(1) 主因子分析により、学習者のCBIに対する認識に関する因子を抽出し、(2) 分散分析及びクラスカル・ウォリス検定により、授業成績・英語能力・職業志望によってCBIに対する認識（因子）に違いがあるか比較し、その後、(3) 回帰分析により、授業成績・英語能力に寄与するCBIに対する認識（因子）を調査した。その結果は次の通りである。(a) 英語教育に関するCBIについて、内容学習と英語力向上に効果的と考える因子（I）、好意的な因子（II）、英語使用による英語力を実感する因子（III）が、抽出された。(b) 授業成績の違いによって、3因子すべてにおいて有意差があり、(c) 英語能力の違いによって、因子IIに有意差があったが、(d) 職業志望の違いによって、いずれの因子にも有意差はなかった。(e) 授業成績に寄与する因子はなく、英語能力に寄与するのは因子IIであった。これらの結果に関する考察は、発表で行う。また、考察に基づいて示唆も示す予定である。

質問紙調査による回答の揺れといわゆる量的研究の危うさ

Fluctuation of Questionnaire Responses: Possible Fragility of so-called Quantitative Study

東 淳一 (順天堂大学)

キーワード：質問紙調査 SILL 5件法 相関行列 探索的因子分析

質問紙調査において5件法や7件法のように数値化された回答を求める方法が頻繁に行われている。この種の研究では、調査における質問項目の回答として得られた数値データから相関行列が求められ、この結果が探索的因子分析などその後の分析のための入力となる。時に予備調査が実施され、不適切な質問項目の削除等が行われるが、選定された項目には十分な信頼性・安定性があると仮定し、その後の分析が行われる。本報告では、**Strategy Inventory for Language Learning (SILL)** の日本語版を用い、5件法の50項目からなる質問紙調査を大学生の同一回答者に2回実施し、回答の揺れを分析した。2回目の質問紙調査は1回目の調査実施直後に行ったが、質問項目は1回目と異なりランダムに配置され、1~5のスケールではなく-2~+2のスケールを用いた。有効な回答者数は62であり、2回目の調査の回答は分析にあたり1~5のスケールに変換した。各回答者ごとに50個の回答データを合計し(最大値250)、1回目と2回目での回答合計値の相関係数を求めたところ0.86を得た。次に同一回答者内の1回目対2回目の個々の回答データ間の相関係数を求めたところ、相関係数の平均値は0.70、最大値は0.95、最小値は-0.96、標準偏差は0.34であった。負の値はもちろん異常値であり、相関係数0.80以上の質問項目が31、0.70以上の項目が46あった。これらの結果より、多少のばらつきはあるが同一回答者内での回答パタンの相関は高く、揺れはある程度少ないといえる。次に、50ある質問項目の回答データ間について、1225組すべての組合せの相関行列を求めた。その後1回目と2回目それぞれについて、すべての項目ペアについて相関係数の値により順位をつけて順位相関を求めた。その結果0.61の相関係数を得た。これらの結果から、同一質問項目の回答の安定性もある程度高いと判断できる。ただ、これら質問項目の回答データをさらに探索的因子分析等次のステップの分析の入力とすることにはある程度の危険性が伴うと言わざるを得ない。介入実験等の前後に同一の質問紙調査を行い、学習方略等が変化したことを推論する場合、実施した質問紙調査に本来生じる誤差を超えての変化であることが保証されねばならないであろう。また1度きりの質問紙調査を実施する場合、調査結果データの安定性が何らかの形で担保されるべきである。質問紙調査を用いたいわゆる量的研究の脆さを認識し、できるだけ質問紙調査を用いた数量化に依存しない研究方法も模索されるべきと考える。

音読・サイトラ・発音学習・TOEIC(R)テスト問題練習の 組合せによる学習効果：

TOEIC(R)テスト課題による検証

Combination Effects of Oral Reading, Sight Translation, Pronunciation Practice
and TOEIC Test Practice as Measured by TOEIC Test Trials

飯野 義一（神戸大学大学院生）

山田 玲子（ATR 知能ロボティクス研究所）

キーワード：TOEIC 学習法 音読 サイトラ 発音

飯野・山田（投稿中）は、実践的な英語学習法として注目されている音読やサイトラに加えて、発音学習、TOEIC テスト問題練習による学習実験を行い、TOEIC テストの課題に直接関連のない課題でも TOEIC テストのスコア向上に寄与する可能性を示した。本研究ではこれら4つの学習法について組み合わせによって効果に違いがあるか検討した。大学1年生を4つのグループに分け、1つのグループでは前期授業内に音読、後期授業内に発音学習（以下、発音）を実施、つまり[音読→発音]の順で学習した。他の3つのグループではそれぞれ[サイトラ→音読]、[発音→音読]、[TOEIC テスト問題練習（以下、TOEIC）→音読]の順で学習した。これらの学習では TOEIC テストの設問を主な言語素材として用いた。プレテスト、ミッドテスト、ポストテストとして前期の学習前、前期の学習後、後期の学習後に TOEIC 形式のテストを行った。本研究ではプレテストからポストテストへの正答率の上昇幅を比較した。

グループ、TOEIC テストのパートを2要因とする分散分析を行ったところ、グループとパートの主効果は有意だったが、要因間の交互作用はなかった。グループ毎の上昇幅は[発音→音読]>[TOEIC→音読]>[音読→発音]>[サイトラ→音読]の順に大きく、[発音→音読]と[音読→発音]、[発音→音読]と[サイトラ→音読]の間に有意差があった。パート毎の上昇幅はパート1>パート5>パート4>パート2>パート7>パート3>パート6の順に大きかった。ただしパート3とパート6は正答率が低下していた。これらの結果から、学習の組み合わせ方によって学習効果が異なること、その効果はパート1やパート5で大きいことが示された。

またトータルの学習量、学習内容ともに同等だが、学習順序だけが異なる[発音→音読]と[音読→発音]を比較すると、[発音→音読]の上昇幅が[音読→発音]よりも大きく、有意差があった。この結果は発音学習と音読には順序効果があり、発音学習をしてから音読を行った方が学習効果が高いことを示唆している。さらに、後半に音読を行った3つのグループを比較すると、[発音→音読]>[TOEIC→音読]>[サイトラ→音読]の順に上昇幅が大きく、[発音→音読]と[サイトラ→音読]の間に有意差があった。この結果は音読の前に行う学習としてはサイトラよりも発音学習の方が効果的であることを示している。

本結果は外国語学習で学習要素の組み合わせ方や順序を考慮することの重要性を具体的に示したと言える。今後、実験参加者数を増やす等により実験精度を上げ、どのような組み合わせが効果的かさらなる検討を行いたい。

オール・イングリッシュの授業に対する日本人英語教師(NNEST)と 学習者の Belief 比較調査：

授業内での TL 使用に関する一考察

A Comparative Study of NNESTs' and Learners' Beliefs About TL Use in the Classroom

上野 育子（関西学院大学大学院生）

キーワード： Belief オール・イングリッシュ NNEST TL 使用 授業実践

EFL 環境である日本の英語教育の現場でよく用いられるタームの一つに“オール・イングリッシュ”というカタカナ英語があるが、このタームで表現されるオール・イングリッシュの授業形態は様々ではなく、実践者である教師や参加者である学生達によって様々な受けとめられ方がある。しかしながら実際にはどれ位幅がある受けとめられ方をされているのか、日本人英語教師や学生達が授業内での TL(Target Language)使用に関してどのようなビリーフを構築しているのかを調査した研究はまだ少ない。本研究の目的はこれらの点に着眼し、①英語教師と学習者が授業内での英語使用に対して、どのようなビリーフをもち、それらは授業実践の場でどのように反映されるのか、②授業内での英語使用についてのビリーフは言語学習に関する他のどのようなビリーフと影響しあっているのか、③オール・イングリッシュの授業実践において教師と学習者間のビリーフにどのような差異があるかという 3 つのリサーチ・クエスチョンに基づき量的調査と質的調査を行った。量的調査では、34 項目から成る Beliefs about Language Learning Inventory : BALLI (Horwitz,1985)に新たにオール・イングリッシュの授業に関する質問 6 項目を加えた質問紙 (5 件法プラス記述式) に日本人英語教師と大学生それぞれに回答を依頼し、その結果の統計処理を行い比較分析した。又、質的調査では、質問紙の記述部分にオール・イングリッシュの授業に対するイメージとして教師、学習者の立場で自由に記述をしてもらった文章を肯定派・否定派と分類し比較することで、量的調査では見えなかったそれぞれの参加者達のビリーフの詳細を浮き彫りにすることを試みた。結果、“オール・イングリッシュ”授業というタームが表す TL 使用の割合については教師・学習者両方が幅のあるビリーフを構築しており、その使用割合の想定パーセンテージは 10~100%の数値を示した。又、学習者が全体的にオール・イングリッシュの授業に積極的に肯定しているのに対して教師はどちらかと言えば消極的であり、ノンネイティブ教師として英語使用授業実践の困難さと母語使用の必要性を感じながら授業を行っている様子が質的調査の結果から推察された。文科省が高等学校のみならず中学校でも徐々に TL による英語の授業実践を推奨しつつある現在、このような日本人英語教師と学習者の授業内での TL 使用に対するビリーフの差異を明らかにすることは実際の英語教育現場での TL 使用の具体的な設定を考えていくための判断材料の一つとなり、その点が本研究の重要な役割であると考えられる。

日本人英語学習者の語彙連想量と英語による ライティング力の相関関係

A Consideration on the Correlation Between Japanese EFL Learners' Word Associations and English Writing Ability

鳥羽 素子 (大阪市立大学大学院)

キーワード：メンタルレキシコン 語彙連想 語彙ネットワーク ライティング 相関

本発表では、まず、日本人英語学習者は、第二言語のメンタルレキシコン内において、どのような語彙ネットワークを構築しているのか、その際、母語である日本語がいかに影響してくるのかという点に関して、英語の語彙を刺激語とした語彙連想課題を用いることで得られた結果を報告する。その上で、語彙連想課題における学習者の語彙連想量や連想反応語の内容と、実際の言語運用力にはどのような相関関係が見られるのかに関して、15分間の時間制限によるフリーライティング課題を併せて実施することで明らかになった点を報告する。参加者は、非英語専攻ではあるが、外国語として英語を学習する日本人の大学1年生51名であった。語彙連想課題に使用した刺激語および連想反応語の分類基準に関しては、門田(2002)およびYokokawa et al.(2002)の先行研究を参照した。語彙連想課題に関しては、提示された英語による連想刺激語を見て、1分30秒の時間制限内に脳内で連想される語彙を英語も日本語もすべて書きだしてくださいという指示が与えられ、被験者らは連続して計8語(内訳：抽象・具象名詞4語、上位カテゴリー名詞4語)の語彙連想課題に取り組んだ。

語彙連想課題の結果、刺激語1語における被験者一人あたりの平均連想語数は、抽象・具象名詞では10語(内英語による連想9.6語、日本語による連想0.4語)、上位カテゴリー名詞では13.5(内英語による連想12.4語、日本語による連想1.1語)であり、上位カテゴリー名詞を刺激語とした場合の方が、抽象具象名詞を刺激語とした場合よりも連想反応数が多いという先行研究と同様の結果が得られた。また、語彙連想課題における反応語を分類した全体的な傾向としては、カテゴリー・事例関係にもとづく連想が最も多く、次にシンタグマティックな関係にもとづく連想が多いという結果が得られた。しかしながら、フリーライティング課題における延べ語数との相関における全体的な傾向としては、カテゴリー・事例関係にもとづく連想反応数とライティングの延べ語数の間に相関は見られなかった。その一方で、シンタグマティックな関係にもとづく連想反応数とライティングの延べ語数には有意な相関が示された。この結果から、アウトプットによる言語運用の機会を積極的に増やすことは、日本人英語学習者のメンタルレキシコン内における語彙ネットワークの構築をさらに促進するのではないかという新たな検証課題が考えられる。本発表では、ライティングの延べ語数と語彙連想反応総数や英語による語彙連想反応総数との相関結果の考察も行う予定である。

Creating and Implementing a Vocabulary Learning Program Using Free Web Services and Software

フリーウェブサービスとソフトウェアを用いた語彙学習プログラムの開発と実践

SULVA, Mishka (大阪教育大学大学院生) YOSHIDA, Haruyo (大阪教育大学)

キーワード : CALL, MALL, Vocabulary Learning, PAC Analysis

Academic vocabulary can be especially difficult to learn due to its broad range, context-independent nature, and overall lexical complexity. Following the development of CALL and MALL (Mobile-Assisted Language Learning), more recently, internet and cloud-based services have allowed users the access to study from any device at any time and can aid us in the teaching of these challenging words.

This study utilized the website Memrise.com, the video sharing website YouTube, and a blog to create a three-step vocabulary course for university undergraduate students to study the first three sublists of the Academic Word List. The course encompassed a noticing stage, a rote practice stage, and contextualized practice in the form of a cloze exercise. Vocabulary items were grouped by part of speech and divided into sets of ten. 47 undergraduate students in a university intermediate oral English class acted as participants in an approximately three month treatment.

Memrise is a website for vocabulary study and includes two types of course levels, “multimedia” and a standard one based on rote practice and spaced repetition. Multimedia levels allow for the use of certain embedded content such as YouTube videos and Slideshare presentations. The website also has some unique features like a ranking system, and the ability to follow other user’s progress.

For the noticing stage, the researcher prepared short videos of text which presented the target words in context. Videos were created using PowerPoint, then uploaded to YouTube and included in the course as multimedia levels. In each video, a sentence containing a target word was shown twice; during the first presentation, the text of the sentence silently appeared from left to right. On the consecutive second presentation, the sentence simultaneously appeared and was read aloud to learners with the target word highlighted. In this way, learners were encouraged to read the sentence once for meaning, hypothesizing when necessary, and then again for confirmation of phonetic information as well as focusing of attention on the target word.

Following the noticing stage, target words were decontextualized and then rote practiced. Practicing included passive recognition, active recognition, and active recall. During this stage, as part of the Memrise system, learners are given points for correct or nearly correct answers. A typical session with 10 words lasted from two to five minutes.

As the final stage in this three-part system of study, a multimedia level was utilized and a link to a blog-hosted cloze exercise was posted. Hot Potatoes, a freeware program designed to create a number of language exercises, was used to create the cloze and appropriate web-compatible code. This code was then copied to the blog hosted by the free blogging service, Blogger.com. After clicking the link in the Memrise course, learners would be taken to the blog page and asked to complete the cloze exercise. This marked the end of the 3 steps and learners could then continue to the next set of vocabulary items.

After the treatment concluded, five participants were selected for interview. A psychological inquiry method called Personal Attitude Construct (PAC) analysis was performed with regard to the learners’ attitudes while participating in the treatment. Participants’ results revealed that the learners typically enjoyed the flexibility of mobile and internet-based studying, the ranking system, and to a degree, spaced repetition. On the other hand, learners reflected negatively with regard to the length of the overall course and certain course components, availability of the full course only when accessed by PC, and delayed playback of the words’ pronunciation.

In response to these short comings, the researcher proposes some suggestions such as the importance of a more comprehensive course that includes generative use and other aspects of word knowledge, the necessity for a wholly mobile application based platform, and increased instructor involvement.

Utilizing platforms and services such as those outlined in this presentation can provide learners with a richer, more effective experience when learning vocabulary with little to no cost for teachers. PAC analysis results clarified some of the strengths and weakness that should be considered when implementing such a course and assure that if used properly, with sufficient in-class support, vocabulary study programs will be a valuable aid in providing more beneficial and individualized instruction.

イメージを用いた句動詞指導：

PAC 分析を用いた明示的指導と偶発的学習効果の比較研究

Image-Based Phrasal-Verb Teaching:

A Comparative Study of Explicit Instruction and Incidental Learning Using PAC Analysis

山形 悟史（大阪教育大学大学院生）

吉田 晴世（大阪教育大学）

キーワード：コアイメージ 偶発的学習 明示的指導 noticing PAC Analysis

句動詞は日常のあらゆる場面で頻用される一方、その意味が、基本動詞と不変化詞の中心義の合算からは乖離しているため、学習者にとっては習得が非常に困難であるとされてきた。しかしながら近年、句動詞の持つコアイメージを明示的に指導する研究が多くなされ、その効果が示されてきている(Condon, 2008; 中川, 2013)。他方、山形・吉田(2013)は、句動詞のコアイメージを用いた動画と、英作文学習を組み合わせた偶発的句動詞学習タスクを開発し、その効果を検証した。検証の結果、学習者がタスク内の英作文に取り組む中で、句動詞のイメージと形式の両方に何らかの形で注意を向けた場合に、*noticing* が生起することを明らかにした。イメージを用いた句動詞指導に関して、明示的指導と、偶発的学習とを比較する研究は、筆者らの理解ではまだ少ない。そこで本研究では、従来型の明示的句動詞指導の効果と、グループカードゲームの中で、学習者が句動詞を偶発的に学習する効果とを比較することとした。

2種類のトリートメント差を明確にするため、2013年12月、2週にわたる実践を行った。実践には、日本人大学院生6名(以下、協力者)が参加した。協力者には1週目にカードゲームに参加、2週目には明示的指導を受講してもらった。カードゲームとは、句動詞のコアイメージを基に描写された絵カードに対し、適切な基本動詞と不変化詞を話し合いながら組み合わせるというタスクであった。なお、協力者は2つのグループに分かれ、ただゲームを楽しむようにと指示を受けた。明示的指導では事前にテスト予告をしたうえで、筆頭発表者が映像資料を用いながら、句動詞の意味とイメージの関係について、全員に明示的指導を行った。

各週の最後には受容テスト(L2-L1)、と産出テスト(イメージ-L2)の2種類を直後テストとして実施、遅延テストとして各1週間後に行った同一のテスト間比での保持率を以て、両者の効果を分析した。なお両トリートメントには等しく、約30分を要した。分析の結果、カードゲームで偶発的に学ばれたアイテムが、明示的指導で学ばれたアイテムを両テスト間での保持率、特に受容的テストでの保持率において顕著に上回った。結果について数人の協力者に、質的分析の一種であるPAC分析を実施したところ、カードゲームの中で、より強く句動詞とそのイメージに協力者の注意が向けられ、気づきが生起した場合に、テストでのアイテム保持率も高い旨が表出した。

結果、イメージを用いた句動詞指導は、教師主導の明示的指導よりも、学習者自身で主体的にイメージと句動詞の関係に気づき、より高次な認知処理を可能とする偶発的学習において、より有効に機能しうる旨が示唆された。

官民協働による「おかやまイングリッシュビレッジ事業」の展開

The Okayama English Village Project: A Public-Private Partnership

福原 史子（ノートルダム清心女子大学） 大橋 典晶（中国短期大学）

城之内 庸仁（岡山市立福浜中学校） 水野 純次（倉敷市立精思高等学校）

キーワード：小学校外国語活動 異文化体験 自然体験 コミュニケーション 協働

岡山市では、小学校で学んだ英語を実際に活用する場として、2012年度から2年間にわたり「おかやまイングリッシュビレッジ事業」を実施してきた。実施主体は、岡山市教育委員会と中国学園・中国短期大学で構成するおかやまイングリッシュビレッジ事業実行委員会であるが、加えて、地域創生を目指すNPO法人「連塾」内にあるローバル英語研究所（松畑熙一名誉所長/大橋典晶所長）や県内の大学関係者、英語教育関係者、英語母語話者、学生、外国人留学生、高校生、地域人材等、多方面からの協働により展開してきた。

本事業を通して 1) 児童は何を有意義だと感じ、何に困難を感じたか、男女差、学年差、学校外の英語学習経験による差はあるか 2) 英語学習に関する意識に変化はみられたか 3) 官民協働で実施する意義はどこにあるか について探ることを目的とした本研究では、4回の実践それぞれの終了時に、参加児童を対象に行ったアンケート調査をもとに考察を進めた。

実践の概要

岡山市在住の小学5・6年生を対象に、瀬戸内海の犬島にある犬島自然の家にて1泊2日の「イングリッシュビレッジ in 犬島」（2012年8月18-19日/2013年8月11-12日/定員30名）と、廃校となった小学校にて日帰りの「留学体験 in 旧福谷小学校」（2012年11月23日/2013年11月23日/定員50名）を開催した。児童は5～6名ずつのグループに分かれ、それぞれに外国人スタッフ1名と大学生または高校生ボランティア1名が加わった。英語によるコミュニケーションを図りながら、外国生活疑似体験、自然体験、異文化体験、劇やゲーム等の体験活動を行った。

成果と課題

アンケート調査は、5「とても勉強になった」から1「まったく勉強にならなかった」までの5段階から一つを選ぶ方式とし、平均値で比較した。全ての活動が平均4.3以上の高い値を示したことから、児童は有意義だと感じていることがわかった。その中で、5年生よりも6年生、男子よりも女子の方がほぼ全てにおいて高い値を示した。反面、学校外の英語学習経験による差は認められなかった。自由記述では、英語によるコミュニケーションの困難さも含めて、長時間英語にふれるよい機会とする肯定的な記述が多く観察された。また、今まで（参加前）より英語を勉強したいと「とても思う」「どちらかといえば思う」と答えた児童の割合が、実施日順に96.0%、89.4%、96.3%、97.8%であったことから、本事業は児童の大きな動機づけとなり、意識の変化をもたらしたといえる。

本発表では、具体的な実践の様子と、アンケート結果の詳細な分析に基づく成果と課題を論じた上で、官民協働で実施する意義について検討したい。

Video Intervention to Raise Awareness of Common English Intonation Patterns

イントネーションの意識向上のためのビデオ教材の作成

PORTER, Mathew (Hiroshima Bunkyo Women's University)

OKADA, Azusa (Hiroshima Shudo University)

キーワード : metacompetence, intonation, video, autonomous learning

Wrembel (2005) has proposed a model for L2 phonological acquisition in which phonological metacompetence, a type of procedural knowledge about how to apply the rules of L2 phonetics and phonology, is essential to improving pronunciation in the L2. In her model, making students metalinguistically aware of L2 phonetics and phonology is thought to help facilitate intake and acquisition, as well as support the development of the ability to self-monitor. Phonological metacompetence can be seen as the basis for metacognitive pronunciation strategies that will help students of a foreign language continue to improve their pronunciation outside of the classroom. In a study of pronunciation strategy usage among ESL students in the US, Eckstein (2007) proposed that pronunciation strategies could be organized according to Kolb's experiential learning cycle, a four-step iterative process that begins with concrete experience and is followed by reflective observation, abstract conceptualization, and active experimentation. Increased phonological metacompetence would equip students to operate effectively at each stage in the cycle.

Pronunciation is often an overlooked or quickly passed over area of language study in EFL classrooms, especially for non-English or non-education majors. The researchers believe that helping non-English majors improve their perception and production of L2 sounds is important in improving motivation for English study and might lead to greater achievements in overall proficiency, particularly in listening ability. For this study, the researchers created three short videos introducing different types of sentence-level intonation patterns: falling (statement), rising (question), and falling from extra high pitch (excitement), hoping to raise students' awareness of intonation in an enjoyable and memorable way. In each video, a short skit was performed using the same English key phrase, "It stopped raining." Each video also included some information about the intonation pattern being used and time for listen-repeat practice.

The researchers piloted the videos with students to look for changes in perception and production of the three intonation patterns in addition to attitudes about studying pronunciation using the videos. Two similar (based on TOEIC Bridge score) listening classes (n=62) were used, one being the contrast group and the other the treatment group. Perception was measured using a multiple choice test of 10 recorded sentences, each using one of the three patterns. Production was measured using student recordings of the key sentence spoken with each intonation pattern and then rated by two native speakers for intelligibility. The treatment group was shown the videos, and one week later all students took post-tests following the same format as the pre-tests. Finally, a questionnaire using 4 questions with a 4-point Likert scale as well as a single question seeking open answers was used to investigate student attitudes about the videos among the treatment group. Although both perception and production pre-test scores were high for both groups and no significant difference was found in production between the contrast and treatment groups, a slight improvement in perception was found in both groups, although the contrast group did not watch the videos. Questionnaire responses were favorable and students expressed interest studying pronunciation through videos.

Problems existed with the pilot's experimental construct because it was conducted at the end of the course and the teacher had stressed focusing on intonation during shadowing practice for the upcoming final exam. The pilot also raises questions about the usefulness of teaching sentence-level intonation if students already show a high degree of comprehension and intelligibility. Therefore, another experiment was designed using two English (non-major) classes (n=65) in which half of each class was randomly assigned to a contrast group. The same format as the pilot was followed with the following changes. In order to eliminate the effect of shadowing practicing on teaching intonation, the experiment took place at the beginning of the semester, before students had been exposed to shadowing. Additionally, during the pre-test students were asked to listen to the same sentence said using each of three intonation patterns and record a translation of each in Japanese as well as describe the characteristics of each pattern in writing in order to assess pre-existing awareness and understanding of intonation rules. The results of comparisons between the contrast and treatment groups, as well as pre- and post-tests will be discussed.

リーディング授業における学習者の教室外活動促進と 学習経験の個性化

Out-Of-Class Learning and a Personalized Learning Experience in a Reading Class

吉田 ひと美（関西学院大学）

キーワード：教室外活動 個人的な経験 学習活動の個性化

発表者は、英語圏に長期滞在経験なく英語学習に成功した日本人を対象に、彼らの英語学習経験を記述するライフ・ストーリー研究を行ってきた。その中で、学習成功者たちが飛躍的に上達した時期に使用した学習方略にのみ焦点を当てるのではなく、学習を開始時から現在に至るひと繋がりを経験として捉えることで、彼らが公式な学習の場（学校・授業など）以外の様々な学習活動（映画・音楽・スポーツなど）に自己調整的に従事していることが明らかになった。さらに、彼らの学習動機の維持には、学習活動そのものが個人的な経験となり、学習活動と学習者の個人的な関係の存在が重要な役割を担っていることなどが窺われた。そこで本発表では、1) 学習者の「教室外活動促進」と、2) 「学習経験の個性化」をという2点を指針とし、学習者が教室外でも学習に従事することで、そこでの学習が個人的な経験となり、結果として得られる学習効果について検証する。

K 大学2年次生を対象とした英語リーディングの授業で、春学期終了時に行ったアンケートでは、ほとんどの学生が家庭学習時間を30分以下と回答していた。秋学期には、学生がグループごとに各ユニットのトピックに関して背景情報や豆知識などを事前に調べ、パワーポイントを利用したプレゼンテーションを授業開始時に取り入れた。さらに、担当グループ以外の学生に対してもトピックに関して興味を持てるよう、教師が誘導していくことも心がけた。秋学期末に行ったアンケートでは、多くの学生の英語学習活動に従事する時間が増大しただけでなく、学生のリーディングに対する取り組み、使用教材に対する評価、学習内容に対する関心や定着度の変化において肯定的な学習結果が窺われた。しかしながら、学習の個性化という観点からは、十分な達成が確認されなかった。その原因として、発表トピックが教科書の内容に限定的であり、学習者の関心とトピックが必ずしも合致しなかったことなどが考えられる。

以上より、短期的には、教室外活動促進によって肯定的な学習結果が求められると言えるだろう。しかし、今回の授業実践において学習経験の個性化は達成を確認することができなかった。学習成功者の学習動機の継続、すなわち、長期的な学習には、学習経験の個性化が鍵であると考えられるため、これをいかに実現されるかが今後の課題であると考えられる。発表の後半では、様々な授業外活動促進及び学習経験の個性化の可能性についても議論したい。

文法・語彙例文集の開発、e-learning 語彙学習システムの開発と 学習効果

The Development of Vocabulary and Grammar Examples for CALL and its Effect

姜 英徹（立命館宇治高等学校）

キーワード： e-learning 語彙 CALL 文法 例文 データベース 例文集

中学・高校では語彙の意図的学習の指導はほとんど行われておらず、単語本による単語テストなどをこまめに行っても十分な成果を挙げているケースは少ない。そこで、生徒がより自発的に楽しくしかも継続的に取り組み、なおかつ教師が学習の進捗状況やテスト結果を個別に管理できる e-learning 語彙学習システムを前任校において開発し、2003 年より 2012 年までの 10 年間、授業等で実践した。

その結果、本よりやる気になれる、早く覚えられる、何度も復習できるので語彙が蓄積されていく、ゲーム感覚でできて退屈しない、英検・模試で意味が条件反射的に答えられた、など反応はとてもよく、英検、大学入試、TOEIC 等において大きな成果を挙げた（姜, 2007, 2008）。

しかしながら、フレーズの穴埋めテストは初学者にとってハードルが高い、生徒の音声を録音するフェイズがない、進捗状況の情報が少ない、テスト結果の蓄積ができないなど、システムにはまだまだ改良が必要であった。また、コンテンツは Duo3.0, Duo Select を採用していたが、1 冊の分量が多い、例文の中に高低のレベルの語彙が混在している、著作権の問題から他校の生徒に ID を付与することができないなど、コンテンツそのものにも問題があった。

そこで、地元企業数社の支援を受けて仕様書からシステムを作り直し、コンテンツ（例文集）も全てオリジナルのものを開発した。コンテンツの作成に当たっては、センター試験（共通一次）過去 30 年分（21 万語）、大学入試問題 5 年分（1,200 万語）、英検 1 級～4 級の過去 6 回分（20 万語）、TOEIC テスト公式問題集 10 回分、TOEIC テスト問題集より模擬試験 14 回分（全 22 万語）における頻度を徹底的に分析し、さらに入試単語本 9 冊分、TOEIC 単語本 9 冊分の重要度、SVL12000 語、JACET8000 語を総合的に加味し、単語・連語を重み付け、レベル分けした独自のリストを使用した。カテゴリは「総合英語」、「英検」、「TOEIC」に分け、それぞれでよく出る形でのコンテンツ（例文集）をレベルごとに 15 セット作成した。各セットには 100 個から 120 個の例文が含まれ、それぞれの例文には 500 個～600 個の単語、100 個～200 個の連語（熟語・定型句）が重複なく含まれている。中学レベルの文法例文集も開発し、これまでに作成した例文数は全部で 2000 個ほどになる。コンテンツは今後も増え続ける。

本発表では、新システムによって新任校で 1 年間指導してきた実践について報告する。

英語学習教材アーカイブの授業での利用

Utilization of the English Learning Material Archive in English Class

平尾 日出夫 (追手門学院大学)

キーワード：CAI 学習教材アーカイブ

序

2012年12月に英語の独学環境の向上を目指して「英語学習教材アーカイブ」を公開した。本報告は、大学の正規授業でこれを利用する際にどのような点が問題となるのかを調査するために、筆者が2013年度春学期に追手門学院大学、英語コミュニケーション学科の1回生を対象に行った英語リーディング1の授業の終了時アンケートに基づいている。履修登録者は36名で、最終の授業アンケートに回答したのは28名であった。

教材

このアーカイブは、ある程度の英語力を前提とし、上級、中級、初級の3レベル別に構成されている。オリジナルのデータは、パブリックドメインが宣言されている、Voice of America (VOA) のものを利用している。本アーカイブのURLは、<http://eigokyozaei.symphonic-net.com/>である。

授業

授業では、初級に70話採録されているWords and their Storiesから12話を選定した。教材を補完するために、語彙確認のワークシートを作成し、前週に宿題として学生に配布した。

授業は、語彙の確認→学生からの質問→テキストを表示した状態での音声の聞き取り・黙読→タスクシートへの入力→確認画面の表示と印刷→クラス全体での答の確認→テキストを見てのシャドーイング→モデルシャドーイング(数名)の順に行った。印刷されたタスクシートは教員が回収し評価した。モデルシャドーイングも簡単なコメントを教員が行い評価した。

アンケート

授業とコンピュータ利用の満足度についてまず調査した。授業を不満(-1)と回答したのは6名、どちらでもない(0)が15名、満足(+1)としたのが7名で平均は、0.036であった。コンピュータの利用については、それぞれ3名、10名、15名で平均は、0.429であった。

次にコンピュータ利用の不満点、良い点、改善希望点を複数回答可で調査した。不満点については、いずれの項目も2名以下、良い点については、いつでも教材を参照できるが8名で、残りはいずれも3名以下、改善要望点については、和訳の表示が17名で、模範解答の表示が10名と続いている。

結語

コンピュータ利用は、良い評価がされているが、授業としては普通という評価である。コンピュータの利用に対して不満がないことは、不満点の回答がなかったことにも表れている。インターネット利用で、ネットワークトラブルを心配したが、30名程度で、2.25Mb程度の音声データへのアクセスであれば、特に問題は生じなかった。ただし、アーカイブをブックマークする初回の授業で、サイトに接続できない学生が数名出た。代替案は常に用意しておくべきであろう。

コンピュータ利用の高評価が、授業としての評価に直結しないわけであるが、その理由は、改善要望点の中から推定できる。かなり多くの学生が、和訳や解答の表示を希望している。このことは、学生が自分の成績評価に強い関心を持っていることを示している。実際、アンケート後の数名の聞き取りでも、成績評価や試験に関して高い関心を示していた。授業での教材利用では、教材環境だけでなく、学生の関心や興味にも配慮する必要があると言えよう。

海外学生の評価に基づくプレゼンテーションの振り返り： ブログ交流から学ぶ世界に通用するアイデアと通用しないアイデア

Peer Review and Reflection of Student Business Presentations:
Blog Exchange Activity Between Japanese and American University Students

塩見 佳代子（立命館大学）

キーワード：ビジネスプレゼンテーション 学生による評価 振り返り

本発表では、CALL クラスで行なった学生のクリエイティブ自己 PR とビジネスプレゼンテーションについて実践報告をすると同時に、海外の学生からの評価を基に行なった、学生の発表内容に対する振り返り活動を紹介する。

タスク学習の背景：ブログ交流におけるクリエイティブ自己 PR とビジネスアイデア提案

日本の EFL 環境では、学んだ英語を教室外で使う機会が少ない状況であるが、最近では SNS や ICT の発達により、どこにいても世界に繋がることできる。そのような状況の中、本研究者の CALL クラスでは、2012 年度秋からアメリカの大学生とブログ交流を行なっている。1 年目は、アメリカの大学生が開設したブログへのコメント書き込みを通じた交流が中心であったが、2 年目は、双方向に交流を行なうことを視野にいれ、本学の学生が行なったプロジェクトに関して、アメリカの大学生に評価をしてもらった。

CALL クラスのビジネスケーススタディの一環として、アメリカの某アイスクリーム店の企業理念やユニークな採用方法およびマーケティング手法を学ぶが、その中で採用されている白い紙袋を活用し、本学の学生が自由な発想で創作した作品を用いて自己 PR を行なった。また、新しいビジネスのアイデアをお店に提案するという設定で発表を行い、クラスの担当者と学生が内容や発表に関して評価し合った。さらに今回は、ブログ交流を行なっているアメリカの学生に、作品への投票とビジネスアイデアに関しての評価を書いて送ってもらった。

海外学生からの評価に基づく振り返り活動

学生は自己 PR の作品とビジネスのアイデアが相手に理解してもらえるか、またどのような反応を受けるか緊張して評価を待った。送られてきたコメントは学生同士ということもあってか、肯定的なものが多く、本学の学生にとっては多少なりとも自信へと繋がるものもあった。しかしその一方、海外（アメリカ）ではあまり受け容れられにくいアイデアであると指摘されたものもあった。

これらの評価を読むことにより、学生は自らの作品とビジネスアイデアが世界に通用するかどうか、また、通用しない場合は何が足りないかを考える機会を持つことができた。そして、ビジネスの提案では、海外でのビジネス展開においては、文化の違いや価値観の違いを考慮に入れながらアイデアを提案することの大切さを学んだ。

学生は、海外の学生から受け取ったコメントを基に、各自が作ったアート作品や発表したビジネスアイデアの内容を振り返り、改善すべき点をまとめてレポートに書いた。このような振り返り活動により、学生は今回うまくいかなかった点を反省すると同時に、世界にアイデアを発信し、異文化において理解してもらい共感してもらうためには、今後どのような点に留意すべきかを学ぶことができ、このタスク学習が、英語学習におけるさらなる動機付けと、将来への取り組みについて学生が展望を持つ一助となった。

英語の使える「リケジョ」育成を目指した英語授業

Improving High School Girls' English Skills in Science

問田 雅美（清心中学校・清心女子高等学校）

キーワード：英語ディベート 理系女子 高校生 コミュニケーションツール

現在、「リケジョ」と呼ばれる、理系の女性研究者及び女子学生が注目を浴びている。将来の国際的な科学技術人材の育成を目指して文部科学省が行っているスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業も、平成 14 年に始まって以来 10 年以上が経過し、国際的に活躍するリケジョが増えてきたことの一因となっているであろう。そこで、SSH に求められる「国際的に科学分野で活躍できる女性の育成」を目指して、平成 21 年度から行っている英語ディベートを取り入れた英語の授業（学校設定科目「実践英語」）の実施状況と、これからの課題を報告する。

「実践英語」の特徴

- 「コミュニケーションツール」としての英語の位置付け
- 英語力にばらつきのある、理系クラスにおける一斉指導
- 英語ディベートを行うまでのプロセスにおける、教科横断型のカリキュラム
- 「生命」をテーマとした英語ディベートによる、科学的分野の語彙・表現の習得
- ディベート学習をもとにした実践的な英語ポスター発表及びプレゼンテーション

現在の取り組み

- 文章を読み、自分の意見を述べる練習
- 段階的なライティング課題をもとにした、論理的な英文作成練習
- ディベート形式の理解と特定の表現の習得
- テーマに沿った情報収集とその利用、および専門用語・表現の習得
- ポリシーディベート後のパラメンタリーディベート導入による即興性の獲得
- ディベートから質疑応答のあるプレゼンテーションへ、より実践的な経験の獲得

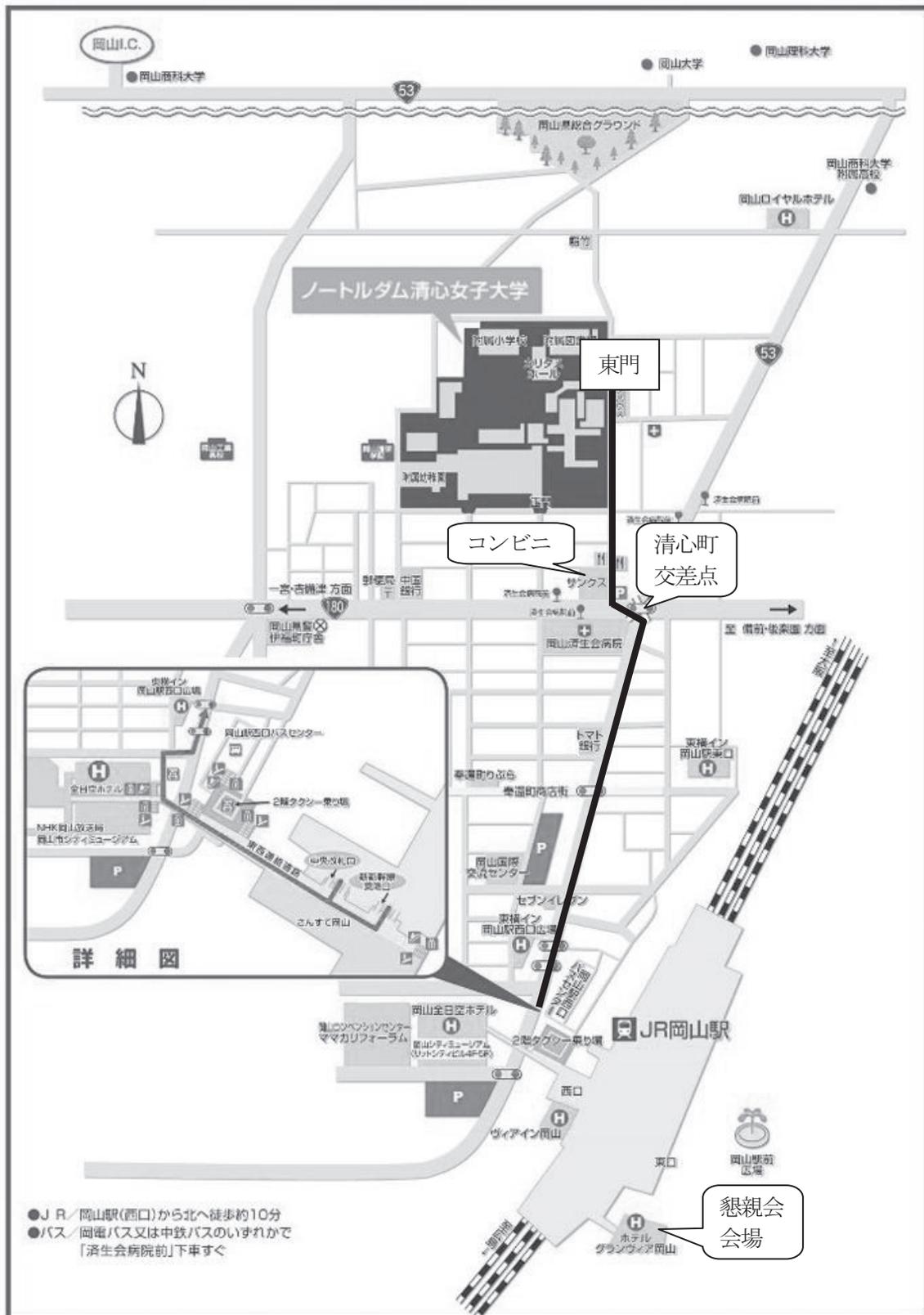
現在までの成果と今後の課題

- 英語ディベートを行ったクラスと行っていないクラスの GTEC for STUDENTS の結果を比較したところ、英語ディベート学習は特にライティングの力の向上に効果があることが分かった。しかし、英語ディベート学習の効果をより具体的に検証し、明確にする必要がある。
- 生徒アンケートから、ディベートで相手の言っていることを聞き取ることが難しい、という意見が多くでていた。観察からも、話者が相手に分かるように十分なアイコンタクトを取りながらはっきりと話すことができているとは言い難い。このような状況を改善するための方法を検討する必要がある。
- 分かりやすい話し方は、この授業だけで身に付けられるものではない。他の英語の授業との連携、および、中学校段階での基礎的な力の育成が必要である。

* 本報告は平成 25 年度科学研究費補助金（奨励研究）「生命をテーマとした英語ディベート指導のプログラムデザインとその有効活用」（課題番号：25908057）による助成を受けて実施された研究の一部である。

会場への交通案内・会場案内図

■JR 岡山駅（西口）から徒歩 10 分（JR 新大阪-岡山 新幹線 47 分）東門からヨゼフホールにお入りください。



学内には駐車スペースがありませんので、必ず公共交通機関をご利用ください。

CALLでも PC教室でも

《キャラボ》

CaLabo

自宅や研究室・準備室でも

CALLシステム/授業支援システム 連携オプション

Bridge

【キャラボブリッジ】

『CaLabo EX』を用いたCALL教室での授業や、『CaLabo LX』を用いたPC教室での授業において、事前・事後学習をシームレスにつなぐ学習環境を提供するCaLaboシリーズのオプションです。講義資料の配布、レポート提出・採点、アンケート集計などをオンラインで一元管理できます。『CaLabo Bridge Tablet Edition』はタブレット機能を備え、タブレットで出席管理、ファイル配布、アナライザ、小テストなどが行えます。



- 1 連携で、CALL/PC教室での出席データを自動的にアップロード
- 2 連携で、その日の授業で使うリソースに一斉アクセス(特許番号 4652710取得)
- 3 連携で、CALL/PC教室で学習した成果を一斉回収、アップロード
- 4 連携で、課題の提出・評価・フィードバックをシームレスに

CALLシステム

EX

【キャラボイーエックス】

『CaLabo EX』は全国800校以上に導入され国内トップクラスの導入実績を誇るフルデジタルCALLシステムです。常に先進の技術を取り入れ、先生・学習者にとってより使いやすい、便利なシステムへと進んでいます。既存のアナログ教材から最新のデジタル教材、音声・画像など、あらゆる教材をネットワーク経由でデジタル配信し、理想的な学習環境をご提供しています。



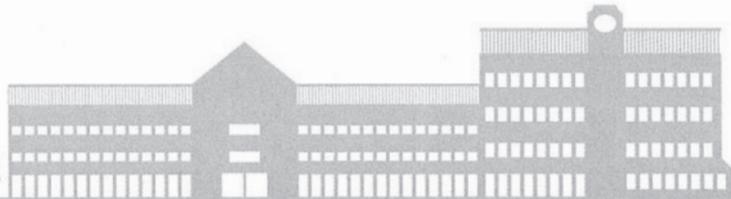
授業支援システム

LX

【キャラボエルエックス】

『CaLabo LX』は、『CaLabo EX』の優れた操作性と先進性を受け継いだ、PC教室向けの授業支援システムです。授業運営に必要な機能でより効率的な授業を実現します。複数教室を統合してできる「分離統合」が可能で、大規模教室での導入実績も豊富です。





ATR CALL BRIX

ATR Computer Assisted Language Learning System

目的に合わせて、効果的な学習ができる！ 英語学習 eラーニングシステム

内田洋行 教育ICT・環境ソリューション事業部

環境マネジメントシステム規格 品質マネジメントシステム規格
内田洋行は ISO14001・ISO9001 認証取得企業です。
●東京地区オフィス(黒川ヶ丘) ●横浜地区オフィス(青葉区) ●大阪地区オフィス(東淀川) ●福岡地区オフィス(博多) ●札幌地区オフィス(南一条)

ウチダホームページアドレス ▶ <http://school.uchida.co.jp/>



東京 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25 東日本大学営業部 ☎ 03(5634)6441 ICT東日本営業部 ☎ 03(5634)6402	大阪 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2 西日本大学営業部 ☎ 06(6920)2632 ICT西日本営業部 ☎ 06(6920)2641
仙台 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡2-4-22 仙台東口ビル6階 ICT東日本営業部 ☎ 022(292)2783	名古屋 〒460-0003 名古屋市中区錦2-2-2 名古屋丸紅ビル13階 中部営業部 ☎ 052(222)7234
札幌 〒060-0041 札幌市中央区大通東3-1 北海道営業部 ☎ 011(214)8630	福岡 〒810-0041 福岡市中央区大名2-9-27 九州営業部 ☎ 092(735)6240